

野鳥たより

—北海道—

第 8 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和46年11月
5月・8月・11月・2月 年4回発行

アカエリヒレアシシギ

メスの方がオスより美しい鳥が日本に四種類いる。タマシギ、ミフウズラ、それにハイイロとアカエリの二種のヒレアシシギである。これらの鳥はいずれも繁殖期には一妻多夫型の生活をしており、メスは卵を産むと抱卵やヒナの世話はすべてオスにまかせ、次のオスとつがいをつくるといわれている。

アカエリヒレアシシギはユビに水かきがあり、泳ぎがうまい。渡りの途中でもたいてい海上におり、プランクトン類を食べている。だからあまり目にふれる機会はないが、数は多い。利札航路の船に乗っているとときに万を越える群に会うことがある。また、ときどき海岸に近い水溜りや、内陸の湖沼にも来ることがある。そんなとき、この鳥は浅いところをクルクル廻りながら泳ぎ、かきまわされて泥と一緒に浮き上つて来る小さな動物を食べているのである。

今年の春、札幌市ススキノの夜空を鳥の大群が舞ったというニュースがあったのを、覚えている方もあるだろう。あのとき、シロハヤブサと報じられた鳥の正体は、このアカエリヒレアシシギであった。翌日、届けられた一羽の死体を見て、シロハヤブサとはよく言ったものと苦笑したことであった。その死体はみごとに夏羽のメスであったが、解剖してみると、皮膚の下にはあつい脂肪の層があった。長い旅の途上で、歓楽街の明るさに感わされて一生を閉じた鳥の無念さが、その黄色い脂肪から感じられるようであった。



(写真は46年9月24日、鶴川海岸で)



東と北と

自然保護三題

■ 自然保護の基調に「水・緑・鳥」

滋賀県では、びわ湖一帯の狩猟禁止を決定、野鳥保護になみなみならない意欲を示しているが、国立公園協会発行の「国立公園」9月号に、野崎欣一郎知事は、これらの事情について次のように述べている。

「滋賀県においては、自然保護の中心に水・緑・鳥を定めている。水は生命にとって根原的なものであり、緑は水を生み、空気を汚染から守る貴重な存在である。そして鳥は自然保護のパロメーターとして、自然保護思想を理解するうえできわめて象徴的な存在である。すなわち、鳥の住める環境は人間にとっても安全な環境であるからである」

この論拠はまことに明快である。自然界はそれぞれの生物のバランスのうえに成り立っている。水は緑によって保全される。緑は野鳥によって守られる。水と緑の恩恵に浴して生存している人間としては、だから野鳥を保護する義務があると思われる。野鳥もまた水と緑のお返しを受けている。

自然保護についての世論の高まりは嬉しいが、自然保護とはなにかという理論につきあたると、簡単には説明できない。野鳥や生物にとっての安息な空間、これこそが人間の安全な自然であることを悟らせることが、自然保護思想への手近かなパスポートである。

■ 鍋田干拓地に野鳥公園（愛知県）

名古屋市から南西へ約20キロ、尾張の穀倉地帯といわれる海部郡弥富町の鍋田干拓地に、わが国に初めての野鳥の天国として野鳥公園の造成が進められている。

鍋田干拓地は昭和21年、農林者が食糧増産を目的に木曾、長良、揖斐の河口に広がる干潟に堤防を築き、人工的に造成された633ヘクタールの広大な干拓地であったが、昭和34年の伊勢湾台風では一面が水没した。こんなことから、昭和43年愛知県企業局が12億5千万円で買上げたものである。

鍋田は野鳥にとってエサも豊富な水鳥の宝庫で、約140種の野鳥が生息しているといわれ、クロトキ、ヘラサギ、オオハシシギ、セイタカシギ、ミヤコドリなど貴重な鳥類の渡りの中継地として、また繁殖地として重要な箇所となっている。

こんなところから、愛知県としては干拓地一帯を野鳥の宝庫として、保養増殖の場とすることに決定、46、47年の2カ年計画で野鳥の楽園を造成する工事を進めている。この事情を県の橋本企業局長は

「鍋田が鳥類の宝庫であり、貴重な場所であるところから、将来をにやう青少年の自然教育の場として利用する」

と語っている。

総工費は3億3千万円で、公園は1.5メートルの垣で囲まれ、野鳥を自然のままに観察できるように、観察路は鳥から見えない林の中を通し、至るところに観察用のトーチカを設けるといふ。自然保護の教育の場を野鳥公園に求めた心憎いまでの施策である。

■ 大沼公園に水鳥を求めて

秋の晴れた一日、心ゆくまで大沼公園を逍遙する機会を得た。私自身は逍遙の気分にはひたりたかつたが、自然の静寂はなく、大沼の周囲はすべて舗装道路と化し、自動車の排気ガスとクラクションの波であった。

道南の観光地として、沼に浮んだ島から島へのアーチ形の遊歩道が完備され、レジャー施設としての発展も目ざましい。しかし大沼の一日は、私に疲れと憤りしか残さなかった。

ほんらい大沼は、原始性に富んだ湖沼として、道東の風蓮湖や、トーフツ湖、また湧洞沼等と共に、植生の豊かな水鳥の繁殖渡来地である。

ところが目あての水鳥は大沼では殆んど発見することができなかつた。あの浅い沼を、モーターボートが、芦と泥をかきまぜるように走り回る。また東大沼通いの観光船がひっきりなしに往復する。岸边は沼をめぐってすべてアスファルトの道路である。

支笏湖や洞爺湖のようなカルデラ湖には、植生にさしたる変化もなく、野鳥の繁殖にも影響がない。したがって水の汚染や周囲の景観を破壊することがなければ、観光船がめぐることには異議をささむ気持はない。しかし植生の豊かな湖沼は、数千万年の歴史を秘めて醸成された自然の財産である。こうした湖沼や湿原は人間の力で復元はおぼつかない。徹底して守るべき措置がほしいものである。

ヨーロッパの鳥たち

土 屋 文 男

6月から7月にかけて、イタリア、スイス、チェコスロバキア、デンマーク、西ドイツ、オランダ、フランス、イギリスなど8カ国を訪問した。他に目的があつたので、野鳥保護の現状など細部にわたって調べられなかったが二、三の知見をえた。

わが国は、近年あまりにも急速に発展した国であり、いろいろな面でぜいたくな国なので、こうした点ではみるべきものもなかったが、環境汚染に対する防除の姿勢や自然保護についての関心の点では、遙かなへだたりを感じざるをえなかった。

わが国の子供の中には、ヒバリの声を一度も聞いたことがない者、カブトムシはデパートのバーゲンセールで買うものと思っている子供も少なくない現状である。

彼の地では、住民がよく生物のことを知っており、われわれに自慢した。パリのセヌ河畔では、魚籠(びく)をあげていっぱいになった魚をみせてくれた。人魚の像で有名なコペンハーゲンの岸は、あの像の右手でタラが釣れるといった。



フランスの子供たち……キツツキの生態を調べている



ローマのトレヴィの泉……イワツバメが飛んでいた。夕方になると、それこそ蚊柱のような無数の大群がみられた

夜は有名なチポリ公園を見に行かず、ホテル前の森の中で、いわゆる「ナイチンゲール」を聞く。デンマークの鳥は「キタサヨナキドリ」であつた。

ジュネーブの朝はレマン湖畔の小鳥たちのコーラスで目がさめる。鳴きかたは違うが外観は似ているシジュウカラが、窓に置いたピーナッツにやつて来る。民芸品も鳥をモチーフにしたものが多く、ジュネーブでは「アオカワラヒワ」の木彫の壁掛けを買った。

ローマの夜8時はまだ明るい。それこそ蚊柱のようにツバメが群れていた。イタリアのビールはまずく、スパゲッティにはじまる長い長い食事中、空のツバメばかり眺めていた。

北のローマといわれるプラハ、共産圏だけに、まだ日本人は珍しがられた。

キノコ狩りが人気のあるレクリエーションだという。街頭にイケスがつくれ、コイが売られるようになるとチェコの秋の訪れを市民は知るとのことだつた。チューリヒから飛んだチェコスロバキア航空機は、自動車や機関銃で有名なスコダ工場の煤煙の上を飛んで首都のプラハに入ったが、プラハ城の森は小鳥たちの声でいっぱいだった。

(本会副会長・医博)

エゾアカゲラ

小堀 煌 治

野幌の原始林をはじめて知ったのは5年前だ。

何の気なしに訪ずれたのだが、その素晴らしさに圧倒された。林間を縫う道は整然としているが、一步森の中に足を踏み入ると開拓前のえぞ地がそのまま残っている感じである。

昨年6月新緑がしたたるような頃、鳥の姿を求めて林の中を歩いていると「キ、キ、キ」とするどい警戒音を聞き、2年前を思い出した。「まさか同じ木に」と思いながらも枯木に近づき、少し離れて待ってみた。はたしてアカゲラが一直線に枯木の穴に飛びこんだ。倒れかけた枯木には5個の穴がある。2年前は上から二番目、昨年は一番下で地上2メートルほどの所である。抱卵中らしい。2週間後、カメラを据えて待機した。なかなか巢に入らない。最初にエサを与えたのはメスである。メスが何度かエサを運んだ後オスが恐る恐る近づいた。メスとオスのエサを運ぶ割合は2対1くらいである。

不思議なことに気がついた。ヒナの鳴声から判断すると確かに4～5羽はいるはず。しかし穴から顔を出すのはきまって頭の赤いオスばかり。どう考えても自然界の法則に反することである。

後で文献を調べると思った。幼鳥の頭は全部赤く成鳥になってはじめてオスは赤、メスは黒と色別されるそう。雛のきびしさにも驚いた。親鳥の気配でヒナ



は穴から顔を出し騒がしくエサをねだるが、親鳥が一声警戒音を発するとピタリと鳴き止む。見事なものだ。それから1週間ヒナは無事巣立った。今年はその木に営巣した形跡は見当たらない。

カルガモの潜水採餌行動を観察して

森 口 和 明

観察日時 昭和46年8月27日 天候 晴
場所 大沼鳥獣保護区 小沼コイ養魚場(水深1.2m)
種類 カルガモ 8羽 (成鳥1羽幼鳥7羽、幼鳥は成鳥と変わらず、やや小)

陸ガモは潜水採餌しないといわれているが、7羽の幼鳥全部が1回の潜水時間30秒～1分で、次から次と潜水

し数度に1回の割合で魚を捕え、水面に出てから魚をくわえなおして呑みこみ、いつまでも繰り返していた。親鳥は警戒に当たっていたため、ついに潜水行動を観察することができなかった。

後日観察に行ったときには、養魚場には糸が張られ、カモはみられなかった。

昭和24年10月に、函館市郊外志海苔養魚場で観察した

が、その後チャンスがないままになっていた。

○陸ガモははたして潜水しないか？

今年も狩猟講習の講師として、「陸ガモは一般的に潜水採餌 (diving) しない」と講義をしたが、マガモ、カルガモは障害物のない広い海、湖沼で休んでいるとき、突然タカの襲撃を受けた場合、一斉に潜水して逃れ、タカがあきらめるまで繰返している。また、マガモはとくに単独になったとき、反復攻撃された場合には、嘴峰だけ出して潜行して逃れる。

その他コガモ、カルガモ、オナガガモ等の陸ガモも忍者のように岸辺にかくれて、嘴峰だけを出して呼吸している。

カルガモは水田の灌漑溝等で急にのぞかれると、飛ぶことが不可能とみて潜水して逃げる場合がある。

以上の行動は度々観察するが、皆逃避の行動であり、一般的には潜水しないといわれている。

私の観察したカルガモの潜水採餌行動は観察データも少なく、飼育実験研究も行なっておらず、結論を発表すべき段階ではないが、興味のある問題と思う。

この行動は、環境により順応した偶然の試行錯誤によ

る学習か、親から遺伝された生得的行動か、私には未だわかっていない。行動も親から受け継がれると研究された今では、将来ガラパゴス島のイグアナのように潜水する可能性があると考えられる。

函館地方では、未だサケマス稚魚放流に際してカルガモが害を与えている確証はつかめていない。道東では確認されている報道をみたが、完全に潜水採餌をしているかどうか不明である。

北海道各地で完全に潜水採餌の行動をしている場面が観察され、また観察されるのではないかと思われるのでおしらせ願えたら幸いである。

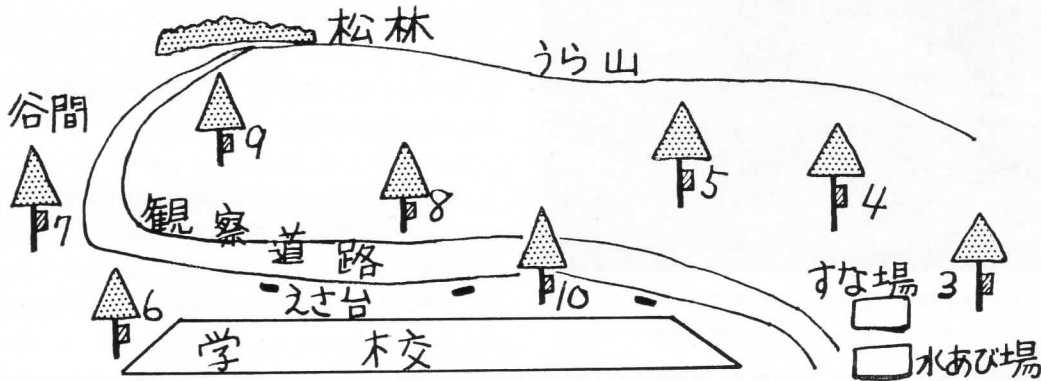
海岸の磯の上で海藻を食べているマガモは、ほとんど陸水 (河川・湖沼) の方には行かず、夜でも干潮時に磯に上って海藻を食べているのがみられる。いずれにしても環境の変化により鳥獣の習性が変わって行くと思われるが、環境に順応変化するテンポ以上に環境の変化の激しい今日、「自然界の一生物である人間」と共に共存できる自然環境を残したいものである。

(函館市 鳥獣保護員)

ムクドリ の 観 察

沢 田 智 明

- | | | | |
|---------|--|-----------|--|
| 1 観察期間 | 昭和45年5月7日～7月10日 | 4 巣箱のかけかた | <ul style="list-style-type: none"> • 向き 南東に向ける • 高さ 地上から3～3.5m • 前開きの巣箱 |
| 2 観察箱の数 | 4グループに分け2こずつ、合計8こ
(番号3～10) | 5 観察したこと | <ul style="list-style-type: none"> • 巣箱のふきんのようす • 巣箱の中のようす、かわりかた • ひなのようすと数 |
| 3 場 所 | 学校の裏山、学校から10～30mくらいはなれたところ。巣箱は50～60こある中に、観察箱8こ | | |



・気がついたこと

6 観察箱3号についてのまとめ

- 5月7日 きょうから観察を始める。かれ葉、ゴミ、よもぎが少し入っていた。
- 5月14日 巣箱の中のようすが少しずつ変わり、巣材の量がふえてきた。ねずみ色の鳥の羽根がまぎっていた。付近で親鳥がいないので、あまり巣箱を見ることをやめた。
- 5月23日 だんだん巣材の量がふえ、形もだんだん丸くなってきた。おもしろいものを発見した。巣材にビニールやナイロンのきれはしが入っていた。
- 5月28日 巣の中に卵が6こ入っていた。うれしくてみんなでかわるがわるのぞいた。水色のきれいな卵だ。親鳥が、気になるのか、近くの枝でギャーギャーさわいでいた。
- 6月4日 28日の観察とかかわらず、水色のきれいな卵がならんでいた。はやく、ひなになればいいなあと、みんなで話し合った。
- 6月12日 おどろいた。卵1こをのこして全部ひなにかえていた。からだ全体が赤むくれて、毛がはえていない。巣の底の方でごそごそ動いていた。なにか気持ちが悪い感じがした。頭と目玉が特に大きいのが印象的だった。
- 6月17日 全部ひなになったのに1わだけカラスにとられて、親鳥がカラスを追いかけた。かわいそうだ

った。のこりのひなは、体に毛がはえ、黄色い口ばしでえさをほしがっていた。

6月22日 きょう見ると、とび出しそうだった。口だけは黄色いが体も大きくなり、そろそろ外に出るのだろうか。

6月25日 きょう見ると全部ひなどりがいなくなっていた。巣の中には、豆つぶのようなものがたくさんはいていた。のこった卵はくさっていた。

7 まとめ(この観察を通して考えたりわかったこと)

- ・巣材が、今までになかったもの、たとえば、ビニールやナイロンが入っていたこと。
- ・卵からひなになるまで、約2週間(12~14日間)かかっていること。
- ・ひなになってから巣立つまでは、10日くらいかかっていること。
- ・われていたり、すきまのある巣箱には、はいらないようだ。また、去年そうじのとききれいにしていない巣箱には虫がついていて、鳥はいらないようだ。
- ・谷に近い方は、あまりはいらないようだ。
- ・観察箱では、1こはいていた。

◎10月にはいつて、校舎の裏山の巣箱全部そうじをしたが、観察箱以外の巣箱は、ほとんど巣がはいつていて、ムクドリが巣立ったあとがみうけられた。

(旭川市立台場小学校6年)



(写真は46年5月23日 石狩川河口で
萩千夏子さん撮影)

え? ヘンなかつこうしているって? これでも一生けんめい働いているところなんですよ。いま、ゴカイを穴から引っぱり出そうとしているんです。ダイゼンさんやオオソリハシギさんなんかは、からだも大きいし足も長いから、ゴカイを一息に引き出してツルツルッと食べてしまうんだけど、ボクはからだ小さいから、たいへんなんです。ゴカイの方でも、力を入れて引き出されまいとするし、無理に引っぱってちぎれると、せつかくのゴチソウを半分損しちゃうから、慎重にやらなくてはネ。

それでも、こんなに力を入れてるでしょう。だから急に抜けるとヨロヨロして、しりもちをつきそうに(マサカ)なるんです。そんなところを写真にとられたらかなわない。

あ、申しおくれました。ボク、メダイチドリです。春と秋の干潟では、皆さんにお目にかかる機会がわりに多いですよ。夏羽は胸が茶色でキレイです。でも口の悪い人は、ボクの顔を正面から見るとマンガのタヌキに似ているってひやかすんです。いやだなあ。

江 差 の 野 鳥

小 森 利 夫

江差町に住むようになって12年間に、姿や声に接した野鳥は、ホトトギス、カッコウ、ツツドリ、ムクドリ、コムドリ、クロツグミ、ヒレンジャク、コマドリ、ヒヨドリ、ヨタカ、ウグイス、アカゲラ、コガラ、コウライキジ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ヒバリ、シヨウビン、シジユウカラ、それにスズメ、カラスなどである。右のうち、姿を見たのはカッコウ、ムクドリ、コムドリ、ヒレンジャク、ヒヨドリ、ウグイス、アカゲラ、コゲラ、コヨシキリ、コウライキジ、ヒバリなど。声だけ聴いてそれが何鳥かわからず、また姿を見てもわからずに過ぎてしまうことが多く、家に帰って図鑑を見たりソノシートできいてみるのだが、それだけでは容易に判断がつくものではない。それにつけてもこの町にも野鳥愛好者が居ると思われるが、今のところ交流がないらしいのは残念なことである。今まで、私が接した野鳥の中から、印象ぶかい幾つかを記してみよう。

ホ ト ト ギ ス

数年前のこと、6月下旬の降りみ降らずみの陰気な夜天窓の下に座っていると、屋根の上を馬場山の方へ過ぎてゆくホトトギスの声をした。ホトトギスはラジオヤソノシート、そのほかのもので何度もきいているので、聴いた瞬間にそれとわかった。啼いて血を吐くとか、絹を裂くような、と形容されているこの声を実際に聴くと、想像していた以上に鋭く、全身に電流が走ったような衝動を受けた。本道にはそれに似た鳴声のエゾセンニユウという野鳥がいて、ホトトギスに間違われていると何かで読んだことがあるが、この夜きいたのは、紛れもなくホトトギスであった。私はすぐ町の裏手の馬場に駆けつけた。すると雨雲の垂れた暗い奥の方からわが家で聴いたと思われるホトトギスがきこえており、一声ごとに遠ざかってゆき、やがて消え去ってしまった。江差でホトトギスを聴いたのはこの一度のみで、それ以来、私にとって幻の鳥となった。

ヒ レ ン ジャ ク

これも数年前のことだが、ある秋の日の午後、イチイの実が赤く成っている裏庭に、およそ百羽ほどのヒレンジャクの群があらわれた。初めて見る鳥であったが、図鑑を見ていたのですぐその鳥とわかった。彼等が一せいに樹に止っている光景は、一寸異様であった。頭に冠をかぶり、ピロードのような褐色の上衣を身につけて、

樹の枝に勢揃いして夕暮までいたが、翌朝はもうその姿がなかった。

今年の3月ごろ私の庭に1羽のヒレンジャクが来た。雀のために飯粒やパン屑を撒いてある餌台に、しばらく居たがどこかへ去って行った。この鳥は常に集団で行動するものと思っていたが、その時1羽だけであったのはどうしたのであろうか、私の不思議に思うことの一つである。

ヒ ヨ ド リ

ヒヨドリの夫婦が庭に来るようになって3年になる。冬に訪れて、春先にはどこかに去ってしまう。毎年のことだが、昨日まで毎日来ていたのに、その日からプツリ姿を消して、もう冬まで来ないのである。この鳥は、撒いてやるご飯やパンも食べるが、リンゴが好物である。二つに割つたリンゴを餌台に置いてやると、きれいに実を食べて、残った皮は、丁度お椀とそっくりの形である。この鳥は見掛けによらず激しい気性で排他的である。自分にはリンゴをつついていのに、別の食べもの、ご飯などに寄ってくる雀にムキになってかかかってゆき追い出してしまう。ヒヨドリより少し小さいコムドリでさえその権幕にへき易して逃げ出す。そんなところを見ると一寸憎らしくもあり、雀が可憐でなくなる。ヒヨドリは食べたものが喉をとおるとき口を空に向けてがそのとき赤い喉もとが見えて妙になまめかしく見える。もともと細身の美しい姿をした鳥である。春になって私の庭にヒヨドリの姿が見られなくなると、やはり寂しさが残る。

コ マ ド リ

コマドリは高山のみに棲む鳥ときいているが、江差町の裏山でその声を聴いた。その名のとおりヒヒーンと馬のいななきのような短く澄み徹る音色である。うば百合の花が終つた7月ごろのことで、近くの雑木林のあたりで啼いているらしい。ラジオヤソノシートなどでしばしば聴く声に寸分違いないと思うのだが、果してどうであらうか。こんな低地にいる筈はないので、それと言い切る自信がないのである。北海道では低地にもコマドリが来るのであろうか。今度誰かに聞いてみたいと思っている。
(団体役員)

無法ハンターをにくむ

三品 忠太郎

根室地方の風蓮湖は、5,213ヘクタールに及び、どこまでも水平のひろがりを見せ、湖岸のみどりが水に映えすみきった空と水平線のまじわりが美しく、すばらしい展望をみせてくれます。

こゝはまた、カモ類などの全国的に絶好の猟場であり各地から大勢の人が、はいりこんで来ます。

自然保護の一環として、野生鳥獣保護の必要性が、論議されておりますが、こゝはまた地域が広大なことから日の出前発砲をはじめ不法行為があとをたちません。

狩猟行為そのものに対する好悪の感情は別にして、私は不法行為を心からにくみます。

全体的にみると、カモ類の一人当り捕獲数は、表1のとおり激減しており、狩猟圧をくわえることにより、絶滅の危機にさらされているなかで、渡りの中継基地としての当地方で濫獲することは、大きく表現すると、北半球のそれに影響をあたえるとさえいえるとおもいます。

図表1. カモ類の1人当り捕かく数推移 単位 羽

	昭和2年	昭和12年	昭和22年	昭和32年	昭和42年
全 国	5.69	8.96	2.60	8.33	2.21
本 道	36.08	17.85	14.69	12.26	9.07

このような観点から、風蓮湖一帯を鳥獣保護区に設定し、水鳥の楽園にしたいと念願しているものです。このため本年3月打合会をもったのですが、強硬な反対意見があり、本年度設定は実現できず、非常に残念におもっているものであります。

私共は、破壊の歴史をくいとめるための使命をもっているはずですので、ちかく是非実現させたいと、おもっております。くわえて、漁業関係の人から危険排除のために規制してほしいとのつよい要望があり、また、「みづからなければよい。」とする心情が、不法行為をうんでおり、有識者や関係者がいくらさげんでも、彼等の良心にはとどきません。

従来から取りしまりを実施しておりましたが効果があがらず、不法行為の横行を、ほしいまゝにしておりました。今年は、いままでの経験から、事前に警察署と十分打合をしたかいて、道東方面で、狩猟解禁日にお

ける違反摘発件のうち、私共の2パーティで5件を検挙することが出来ました。

いままで、取りしまりの実効があがらなかった原因をあげてみますと、

1. 取りしまりに関する情報が、事前に流れていたこと。

- ・部内から洩れているとさえいわれております
- ・地理、地形に関する情報を得ようとした
- ・偽装用の銃袋、ボード等の資材をかりようとしたため等が考えられます。今回は積極的に情報を得ようとして接触してくるものには、意識して嘘の情報をながしました。

2. 取りしまりの技術が未熟である。

供述調書くらいまでなら、どうにか処理できますが、公判に出延して、証言をしなければならぬのではないかな等不安がある。

- ・狩猟活動の分析が不十分であるため、ねばりづよくまつ気持がない

- ・胴長ゴム靴、ボート等、地形にあつた装備が不十分である

- ・鳥獣法、狩猟鳥の判別に精通した支庁職員と警官の2名程度を編成することに配慮が不十分である

- ・応接技術がわるく、無用の緊張感、圧迫感をあたえ素直に非をみとめさせる技術がたりない

3. 使命感が十分でない

- ・狩猟に関する罪悪感がうすい-狩猟民族としての血がそうさせるのか、生活環境の悪化からの反動からか、不法行為をしてまで、野生鳥獣を捕殺する、罪悪感がうすい。

- ・くりかえし、とりしまりをする熱意がたりない

私共が、全力をあげてことにあたる以外に、今のところ方法がないように、おもいます。

また、将来の狩猟がどうあるべきかについて、当地方は未利用地が多く、畑作経営もすくないことから、放鳥による害性のおきる率がすくないなどの点を考え、目下2地域で、猟区の設定について、検討中であります。

私共の取りしまりに関するレベルが向上することをねがって筆をとつた次第です。 (根室支庁林務課)

ソロモンの指輪 (K・ロレンツ著 日高 敏隆訳)

楽しい本にめぐり会うことができた。ここに登場する動物たちは決して擬人化されているわけではないのに、何と人間的(?)な表現をすることだろう。ロレンツ氏を妻ときめたコクマルガラスは愛のしるしに自分の好物を氏の口元へ運ぶし、煙突掃除屋が苦手なインコは、その姿をみると、「エントツソージガキマシタヨー」と叫んで逃げてしまう。また、すてきな餌場におちついたハイロガンたちは、「ここはいいぞ。ここにしようよ」とおしやべりする。これらは動物行動学の第一人者であるロレンツ氏が動物と生活を共にしつつ密な観察を重ねて、我々に解き明してくる彼等の生活の一端である。

著者は、彼等が決して人間のために存在するのではなく、まさに彼等自身の生活を生きているのだということを教えてくれる。それによって動物と我々の距離が遠ざかるのではなく、むしろ同じ生きものの仲間として改めて親愛感をさえ抱きたくなるのである。その心が我々人間の生活の中に根をおろしたとき、人間ははじめて全ての生きものに対する真のやさしさをもって彼等と共存できるようになるのではあるまいか。

(早川書房刊 450円)

鳥の
保護
の本

帰らざる渡り鳥 (F・ボズワース著 藤原 英司訳)

ハドソン湾北方の繁殖地から南米パタゴニアへ5,800キロもの距離を旅するエスキモーコシヤクシギを主人公にこの物語は語られます。

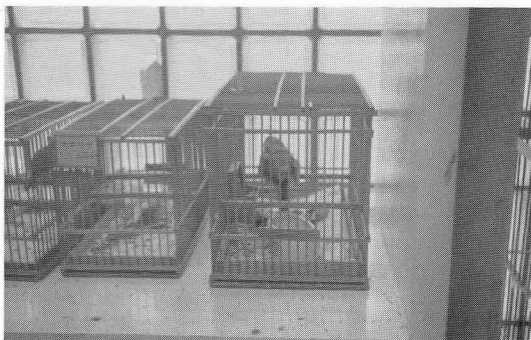
1880年代には空をおお大群となって渡ったこの鳥が、1900年に入ると絶滅を気づかわれるまでになってしまいました。わずかの間にこの鳥をそこへ追いこんだものは、銃を持った人間でした。繁殖地以外の至るところでこの鳥は銃口にねらわれたのです。そのようすが、当時の資料をまじえながらドキュメンタリー風な語り口で展開されます。渡りの状況やつがいの形成、テリトリーなど、自然のしくみの厳しき、巧みさもよく表現され、読者を敬虔な想いに誘います。

しかし、著者にこの物語を書かせたものは単なる自然礼讃の心ではなくて、自然への崇敬を忘れた人間に対する怒りでありましょう。ようやくめぐり逢った雌シギを殺され繁殖の望みをほとんど絶たれながら、なおも繁殖地めざして飛ぶ雄シギの姿には、著者の痛切な祈りがこめられています。人間はこれ以上殺戮者になつてはならないと。シギの生態を冷静に描きながら、その事実を踏まえて生命の尊さを深く考えさせる本書は、新しいタイプの動物文学といえましょう。

(集英社刊 360円)

投 書

デパートで売られている野鳥



先日、札幌のMデパートに買物に行ったついでにペット売場をのぞいたところ、たくさんの野鳥が並んでいたのがびっくりしました。たしかな種類も数も覚えていませんが、メジロ、クロツグミ、ホオジロ、ミヤマホオジロ、イカル、シマアオジがいたことは間違いありません。これらの小鳥は、特別の理由がなければ捕えることも、飼うこともできないと聞いています。これもはつき

りとは覚えていませんが、以前東京などで小鳥店やデパートが調べられ、違反の小鳥が没収されたことがあったような気がします。

デパートで売られている鳥は、正式の手続きを経ている鳥なのでしょう。

メジロなどは、朝鮮や台湾からたくさん輸入されているそうなので、この売場にあった鳥も、あるいは輸入品なのかもしれません。しかし、あまり飼鳥としてはポピュラーでないシマアオジまで輸入品であるとは、ちょっと信じられません。メジロやクロツグミにしても、輸入したものと、こちらで密猟されたものを区別することができないのならば、輸入すること自体、また販売すること自体、日本の鳥類保護のうえからも、いけないのではないかと思います。

参考までに、その後ほかのデパートに行くときは必ず小鳥売場をのぞくことにしましたが、どこも野鳥は置いてないようでした。それだけに、Mデパートのやりかたが気になります。

(事務局から) 江別市の主婦Hさんから上記のような投書(写真も)があったので、全文を載せました。

秋の鵜川探鳥会にて

見 藤 ト シ 子

秋色が次第に濃くなり、木の葉のそよぎにも涼風を覚える9月15日。空に向かってボールを投げたら、一瞬の間にその中に吸込まれてしまうような広く高い空。

その日、午前7時15分発特急バスミシギミは満員の乗客と共に水産会館前を出発した。約2時間半で鵜川海岸に着き、井上先生、土屋先生、野村さん、厚真の梅木さん、藤野沢の小沢さん等々、諸先生を先頭に歩きはじめる。近くの干潟で3羽のシギを早くも発見。野の木々の間を機敏に飛びまわる小鳥と違い水鳥は、ゆったりと羽を伸ばし休むので、何度もプロミナと双眼鏡をのぞくことができ嬉しい。アカエリヒレアシギが2羽とハイロヒレアシギが1羽である。

その後、アオアシギ3羽、オオソリハシギ4羽、ソリハシギ5羽、ダイゼン、イソシギ、トウネン、ハマシギ、コシヤクシギ?。又、セキレイ、チドリ、コガモの群れ。それらの小鳥が入れ替わり、たち替わり、私達を喜ばせ、驚かせてくれる。

コガモがいっせいに飛び立った。30羽、いや43羽。ある時は、60羽ほどもあわただしく私達の目の前を飛びかう。まだ解禁にはなっていない。水鳥達は、楽しいおしやべりで長い旅の疲れを癒していたに違いない。ダイゼンの足の長くて美しいこと。オオソリハシギの嘴の長いこと。クチバシの長い人間などという喩があるが、とてもとてもかなわないだろう。初めてみる、これらのシギ、チドリ類を感嘆の溜息まじりに見つづける。その姿は、水を浴びたり、もぐったり、長い首を伸ばしたり、引込めたり、泳いだり、拙ない足で砂浜を歩いたり、さまざまな姿で楽しませてくれる。

そしてトウネンが波と戯れるようすは、記録映画を見ているようだ。波の音がいつも聞く素敵な曲に聞える。

私が詩人であったなら、きつとこのとき詩を浮かべたであろう。いや作曲家であったら、セレナアデでも出来上っていたに違いない。静かな波の音の中で、私達の近く足音にも気づかず、砂と海とが太陽の光の中で金色に輝くまで、この小さな天使達は踊り続けるのだろう。

一瞬、私はこれからの長い旅で出遇うであろう危険な渡り鳥の心を忘れてしまう。ヨット少年が独りでアメリカへ、などという記事どころではない。北極近くから赤道を越えて南へ渡るといふ大旅行家達。この日の探鳥会のでびきには、こう記されている。

危険の多い旅をつづけるシギ、チドリの優美な姿と哀愁にみちた鳴声を、ただ滅びゆくものの美しさと感じるだけでは、われわれは結局、彼等を絶滅の淵に追いやることになってしまうでしょう……

なにか私にできることをお手伝いしようと思う。しかし、どうするとよいのやらわからない。ただ、この日の見学者であった自分より、一步進みたいと思う。そして恵まれた環境にある我家の周辺に来る小鳥の名を覚え、観察日記を付けることができたらと考える。

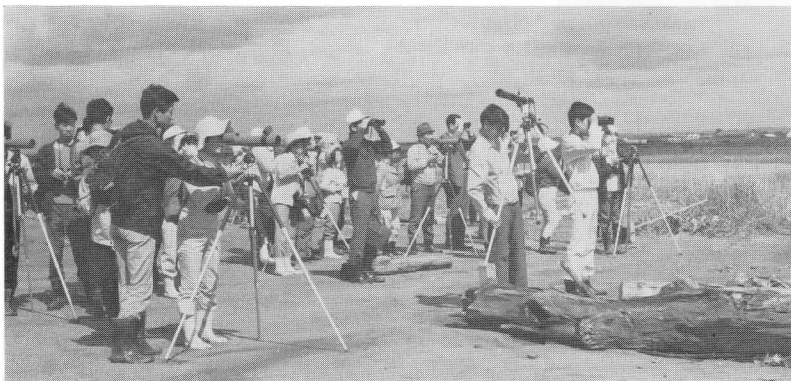
この日の記録 ハクセキレイ、アオサギ、ヒバリ、ムクドリ、ノビタキ、アカエリヒレアシギ、ハイロヒレアシギ、ユリカモメ、アジサシ、イソシギ、オオソリハシギ、メダイチドリ、トウネン、チュウシヤクシギ、オオセグロカモメ、スズメ、ウミネコ、ダイゼン、コガモ、トビ、ハシボソガラス、マガモ、カルガモ、カワラヒワ、オオジュリン、ハマシギ、アオアシギ、ソリハシギ、シヨウドウツバメ、コシヤクシギ(?)

参加者 約40名

註) コシヤクシギはチュウシヤクシギに似てすこし小型

の鳥です。嘴が短いこと、腰が白くないことなどで区別できますが、みわけるのはむずかしいです。北海道からはまだ正式の報告はありませんが、1970年9月に石狩川河口でそれらしい1羽が観察されています。

(事務局)



野幌探鳥会

10月24日は朝のうち天気が悪く、そのためか参加者はあまり多くありませんでした。しかし日中は晴れてわりに暖かくなり、森林公園の紅葉のなかで今年最後の探鳥会を楽しみました。

この日の収穫は、大沢に近い枯木のてっぺんにとまっていた1羽のフクロウでした。皆が下で大騒ぎしながら眺めていても平気な顔をして、じっととまっていました。

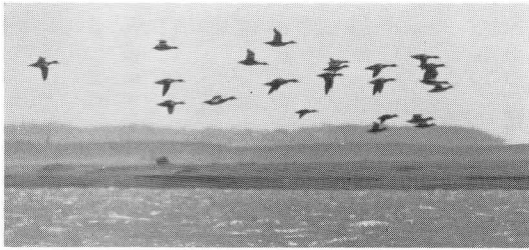
その他ではツグミの群が多く、20羽ほどの群がたえず林の中を移動していました。また、あわせて10羽ほどのノスリをみたのも、野幌では珍しいことでした。すべて南に向っていたので、おそらく渡りの途中だったのででしょう。

この日の記録 ツグミ、スズメ、ムクドリ、キジバト



カケス、ノスリ、ヒヨドリ、ヤマゲラ、ゴジュウカラ、ヘンソウハシブトガラ、エナガ、コゲラ、ウソ、カワラヒワ、チゴハヤブサ、フクロウ、カシラダカ、イカル、アカゲラ、ヤマガラ

参加者 25名



写真左側は鶴川海岸で、上からカモの群、ハクセキレイ、ダイゼン。右側は野幌のフクロウ。(いずれも萩千夏子さん撮影)



■ 鳥獣保護実績発表大会に別海中学校が参加

財団法人日本鳥類保護連盟では、全国の学校などで行なわれている野生鳥獣類の保護のための方法、効果等についての実績を発表するため、鳥類保護実績発表大会を毎年開いていますが、11月19日に行なわれた昭和46年度の大会には、本道から別海町立野付中学校が発表校に選ばれ、他の13団体とともに大会に参加しました。

同校は、野付湾におけるオオハクチョウの観察と救護活動を、昭和36年から続けているものです。できれば第9号でその内容をご紹介します予定です。

■ アムトカ島

アメリカが地下核実験を強行したアムトカ島は、北太平洋上の小島ですが、ここは、むかし日本に渡来していたシジュウカラガンの故郷でした。毛皮をとるために入れたキツネが島を荒したために、シジュウカラガンが日本に来なくなったのだそうです。

ところでアメリカは、本土で養殖したシジュウカラガンの若鳥を今年この島に放したとかで、だからまた日本でこの美しいガンの姿が見られるのでは、と期待している人たちもいるのですが、今度の核実験では島の中央にあった池が干上ったといわれていますが、動物たちにはどんな影響があるのでしょうか。

■ ハクガン

小清水町の濤沸湖でハクガンが観察されたと、斜里町

の森信也さんからおしらせがありました。

10月1日から約1週間、ヒシクイ21羽の群と一緒に行動していたということです。

ハクガンは全身白色で翼の一部だけが黒い、美しい小型のガンです。むかしは日本にもたくさん渡って来たそうですが、今ではほとんど見られなくなり、何年に一度という程度の記録しかありません。昭和45年の冬には新潟県の、オオハクチョウで有名な瓢湖にいたそうで、多分それと同じ個体と思われるものが今春やはり濤沸湖で観察され、森さんやNHKテレビによって撮影されました。そのときは幼鳥でしたが、今度のは成鳥だったので、春の鳥がまた戻ってきた可能性もあります。

■ ヘラシギ

昨年と同じように、石狩川河口でヘラシギが萩千夏子さんによって観察されました。10月3日のことで、2羽いたそうです。

ヘラシギは本誌第4号に写真が載っています。嘴の先が三角にひろがった小型のシギで、北海道ではいまだでシギを観察する人が少なかったため、ごく少数の記録しかなかったのですが、将来は定期的な旅鳥とされるのかもしれない。

■ クロヅル

釧路のタンチョウの群に、今年も10月20日以来、クロヅルの幼鳥1羽が入っているのがみつかっています。

<おねがい>

- ◇ 第7号にも書きましたが、昭和46年度分の会費を払ってくださらない方が、まだ全会員の半分くらいあります。会費は会の活動の基礎になるもので、会費の納入が少ないと、本誌の発行をはじめ、会の行事を行なうことができなくなります。まだ納めていない方は、現金書留か小為替で事務局までお払いこみくださるようお願いします。
- ◇ 本誌に原稿をお寄せください。野鳥に関する観察記録、研究報告、随筆、写真など、なんでも結構です。枚数はあまり長いものは困りますので、長くても400字詰原稿用紙10枚以内（5枚前後が一番扱いやすいです）にしてください。また、短い方はいくら短くても差支えありません。
- ◇ 原稿でなくても、会の活動や本誌の内容についてのご意見、ご質問などを、遠慮なくお聞かせいただければさいわいです。

<事務局だより>

- ◇ 事務多忙のため、発行がたいへん遅くなってしまいました。申しわけありません。
- ◇ 今秋の札幌は、ツグミの非常に多いのがめだちました。10月19日から11月4日までがとくに多かったようにみえましたが皆様の地方では如何でしたか。そのツグミももうほとんどいなくなり、入れ替りにレンジャクの便りがきかれるようになりました。また長い冬がはじまります。寒さが厳しいという予報が出ているようですが、こんな年には珍しい北の鳥が見られるもの。気をつけて探してください。
- ◇ 今年のアシタラシの活動は、この8号の発行でおわります。また来年、新しい気持ちで会を発展させるべく努力してゆきたいと思います。皆様の積極的なご援助をお願いします。
- ◇ それでは、少し早いですけれど、どうぞよいお年をお迎えください。